茨木市立春日丘小学校　全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

**（領域ごと）**

①言葉の特徴や使い方に関する事項　　概ね良好な結果であった

②Ａ話すこと・聞くこと　　　　　　　　　　　　 良好な結果であった

③Ｂ書くこと　　　　　　　　　　　　 　　　　　 概ね良好な結果であった

④Ｃ読むこと　　　　　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

**（問題形式）**

①選択式　　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

②短答式　　　　　　　　　　　　　　　良好な結果であった

③記述式　　　　　　　　　　　　　　　やや課題が残る結果であった

**（無解答率）**　　　　　　　　　　　　 概ね良好な結果であった

**（その他）**

〇最も正答率が低かった設問　：２（４）

　 　目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約することができるかどうかをみる設問

〇無解答率が高かった設問　　：　３（２）

　　　目的や意図に応じて、理由を明確にしながら、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる設問

分析

　１４ある設問のうち、９の設問が全国の正答率を上回っていた。領域別にみると、「話すこと・聞くこと」と、「言葉の特徴や使い方に関する事項」のほぼ全てが全国平均を上回っていた。一方、正答率が低かった領域は「読むこと」であった。２（４）の「目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する」設問は、特に正答率が低かった。資料のどの部分を読み、必要な情報を見つけられるかが課題であるが、的確に読むことができていないと思われる。日頃から文章や資料を読むことに慣れて、必要な情報を見つける学習活動を行う必要がある。また、資料を読み取り要約をし、三つの条件に合わせて文を書く力も求められている設問でもある。三つの条件を満たすことができていない児童が多く、その例としては、①決められた文字数で書いていない。②資料から言葉や文を取り上げて書いていないなどであった。また、無解答のものもいくつか見受けられた。「書くこと」の領域も、平均か少し下回っているものがあることから、日々の授業の中で、児童が文章を正しく的確に読んで要約する力や、条件をつけて文章を書く練習などの指導をしていく必要がある。対策としては、①短文づくり、②リーディングスキル、③資料を読む訓練、④条件つき文の練習である。

○●算数●○

**（領域ごと）**

①Ａ数と計算　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

②Ｂ図形　　 　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

③Ｃ測定　　　　　　　　　　　　 　　　　概ね良好な結果であった

④Ｃ変化と関係　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

⑤Ｄデータの活用　　　　　　　　　　　良好な結果であった

**（問題形式）**

①選択式　　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

②短答式　　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

③記述式　　　　　　　　　　　　　　　概ね良好な結果であった

**（無解答率）**　　　　　　　　　　　　 概ね良好な結果であった

**（その他）**

〇最も正答率が高かった設問　：１（４）、３（１）

　　「条件に合う時刻を求めることができるかどうかをみる」設問

　　「棒グラフから、数量を読み取ることができるかどうかをみる」設問

〇最も正答率が低かった設問　：２（３）

〇無解答率が高かった設問　：４（３）

〇全国平均と比べて正答率の高かった設問　：１（３）

学校の特徴的なことについて記入

　　　　・もっとも正答率の高かった設問

　　　　・もっとも正答率の低かった設問

　・もっとも無解答率の高かった設問

　　　　・もっとも無解答率の低かった設問など

○●経年比較●○

**分析**

　１６ある設問のうち、１１の設問が全国平均の正答率を上回っていた。「データの活用」の領域は、全国平均よりもすべて高い正答率であった。３（１）、３（２）は、どちらも９５％以上の正答率であり、ほとんどの児童が、表やグラフを読み取る力が付いていると言える。正答率の低かった設問は「図形」の領域で、複数の図形を組み合わせた平行四辺形について、面積の求め方とその答えを式や言葉を用いて記述できるかというものであった。正解できなかった児童の解答は、①言葉で説明ができていない、②高さがわからず計算できていない等であり、１０パーセントの児童は、無解答でもあった。図形を正しく見ることと求め方を、筋道を立てて説明する力を身につけなければならないことがわかる。４（２）、４（３）は４年生の「数と計算」の領域であり、どちらも正答率は５０パーセント前後であった。計算力の低下と、問題を読み自力でイメージを持つ力に課題があると考えられる。設問に示されている場面から、数量の関係を捉えて、式に表し計算するという力を身につけさせる必要がある。

　算数の設問に関しては、１年生から６年生までの様々な学習の要素を含んでいることから、日々授業を行う際には、学年をさかのぼって繰り返し学習に取り組むことも大切である。

全体的な傾向についての分析

　全体的には、国語、算数ともに全国平均を上回っている。しかし、教科別に見ると、国語は２０１９年度のテスト結果より５％ほど正答率が下がっている。算数においても変化は小さいが、やや下降傾向にある。

特に国語においては、どのような問題につまずいているのか課題を見つけて、今後取り組んでいく必要がある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

　前年度と比較をすると、全体的に学力高位層の割合が減り、学力低位層の割合が増えている。国語においては、低位層がやや増え、高位層が減少し中位層の割合が少し増えている。算数に関しては、中位層はほぼ変わらず、低位層の増加が目立つ。課題を明確にし、低位層を中位層、高位層へと押し上げていけるよう学校全体で取り組みをすすめていく。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

　今年度の学校研究テーマは「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成　～互いに認め合う集団をめざして～」である。研究教科は国語で、研究テーマは「読むこと（説明文の自力読みに向けて）」である。学力向上部会を中心に、月に一度の部会や、春・夏の研修会や秋に研究授業を行い、研究を重ねている。また、校内自主研修会や、学年学級を越えて授業を見せ合う期間を設ける等をして、教職員が互いに授業力を向上できるよう、創意工夫している。６年生が実施した全国学力・学習状況調査の結果分析をもとにして、本校の児童につけさせたい力を学校全体で把握し、系統立てて取り組む計画、実践を行っていく。具体的には、モジュールの時間を活用し、児童の課題を克服していく。学習内容は、月曜日・・短文（条件つき）、水曜日・・リーディングスキル、木曜日・・新出漢字、金曜日・・全校読書である。

　二つ目は、人権教育部会が中心に行っている学級集団づくりである。研究テーマは「平和学習」で、「ひととつながり、ともに学ぶ、個を生かし互いに認め合う集団づくり」を目指している。児童が安心して自分を表現できる学級、学校を主体的につくるため、教師自身が人権意識を高め、子どもの小さなサインや変化を見逃さない資質を養っていく。何事にも意欲を持って取り組める子や、友だち同士で高め合える集団の育成、学びを深めることができる学級をつくることが学力の向上にもつながるため、校内研修会などを通して教職員の学びを深めている。非認知能力を育成するため、キャリア教育や障がい理解教育、生活科や総合での学校たんけん、町たんけんなど各学年において体験しながら、学ぶことの大切さに重点をおいている。

　三つ目は、支援教育部会を中心に、個に応じた指導・支援の工夫を行っている。児童の視点に立ち、一人ひとりの課題に応じた適切な支援を行うことを目指している。支援学級担任と学級担任が日頃から話をして、子どもの様子を把握し、共有できるよう心がけている。また、スクールサポーター３名と連携協力し、学習につまずいている児童や、学校生活に不安がある児童のケアも行っている。授業に入るだけではなく、学習支援の必要がある子どもの課題状況を、担任や授業者と共有し、必要に応じて抽出して学習を見るなど、きめ細やかな指導ができるようにしている。子ども達にとっても苦手なことを克服でき、学習意欲の向上につなが

っていると思われる。

　四つ目は、中学校ブロックでの保幼小中連携の取り組みである。月に一度、中学校の教員が６年生の授業に入り、授業を取り組む様子など児童観察、教科研究のため来校されている。児童にとっても、進学先の先生であるという安心感を持つことができ、小中の段差の緩和であるといえる。就学前の園児の観察や、中学進学に向けての児童観察など、連携・協力をして、校区全体が一つになって子どもを育てていくという姿勢で取り組んでいる。コロナでこの２年間、活動が減っているが、保幼小連携、地域との連携も深めて、子ども同士のつながりを育て、大人ともつながりながら教育活動を行っている。

「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成、～互いに認め合える集団をめざして～」子どもたちにとって、安心して、学べる教室が不可欠である。そのためにも学級の集団づくりは重要である。学力向上と人権教育の両輪で、今後も児童の学力向上と児童の人格形成に、教職員一同が一致して力を尽くしていく。